

不定期連載

フレンティが聞く!

第3回

みえのひとびと



今回は四日市市在住で、ふたりのお子さんを育てるシングルマザーMさんにインタビュー。大変な経験を乗り越えての現在の暮らしぶりや思うことについて語っていただきました。

—日本のシングルマザーはすごく働いているのに収入が低く、貧困が問題になっています。現在の状況はいかがでしょう？

Mさん

給料は手取りで12万円。児童扶養手当4万円と児童手当2万をいただいているので、月18万円程度で親子3人で暮らしています。母がお米や野菜をつくっているの、それをもらったりして。随分助けられています。

正社員だけど、これから給料があがっていく見込みがない。ボーナスも10万円くらい。だから子どもが中学校にあがったら、夜にアルバイトしようと思って。会社にも「給料があがらないのはいいです。でもそのかわりアルバイトさせてください」って言って、許可も得ました。

だからその練習じゃないけど、今日も子どもが友だちのところに泊まりに行っていて。私も仲良くさせてもらっているおうちなので安心だし、ちょっとずつ慣れていってくれたらなあと思っています。

お金の問題は確かに大変。本当にどうしようと思ってシュミレーションしたりもしています。今まではなんとなくうまくやってきたけど、今度上の子が中学に入ったら、どうなるんだろうって。

国から援助がもっとあったらいいなあとは思う。でも反面、あまり甘えるのもなあって気持ちもあるんですよ。どこまで甘えていいの。今でも結構してもらってるよなと思って。医療費とか、授業料・給食費も援助制度があるし。

ただひとつだけお願いしたいと思うのが、もし助けてもらえるならと思うんだけど。今、お金をかけないと勉強できない世の中になっている気がする、悲しいことに。小学生でもみんな塾に行ってる。学校の先生方は余裕がないのかなあ。クラスをまとめきれないとか、そういう問題に悩んでみえて、しっかり勉強をみるというところまでいかない。誰かのこといじめたから「今日は勉強はやめて話し合いにします」ってなったり。それももちろん大事。だけど、勉強は塾でフォローしてもらえるからっていう前提があるような気がして。それだと塾に行っていない子たちはどうなるの?って。

調べてみたら、いろいろな制度を使うと、高校や大学に入ってしまうえば、なんとかやっていけそうな気がするんですよ。だけどそこに入るまでの道筋が見えない。

うちの子もだんだんよその子と比べだしてくるじゃないですか。お金持ちの子もいれば、そうじゃない子もいる。「あそこのうちのお風呂にはテレビがついている」と言ったとき、「ないものはないでしょうがないでしょ。でもこれからあなたたちが手に入れるこ

とはできるよね、じゃあどうしたらいいの？ やっぱり勉強して、それなりの収入がもらえる仕事に就けば、家だって建てられるし、できるんだよ」って言ってあげたい。それで「あ、そうなんや。じゃあ勉強しよ」となったとき、受け皿がない。

なので、そういった塾に行けない子たちが集まれる場所があったらなあと思う。テレビで見ただけ、今そういうところがあるみたいですね。それがもっともっと小さいコミュニティの中で、いろんなところでできたらいいのになあ。退職された先生や大学生にボランティアで来てもらって。

勉強でわからないところを学べる環境はもちろんそうだけど、目標や可能性を持てるような、持たせてくれるような環境が、子どもたちにとって必要なと思う。うちの下の子はすごい欲が深くて(笑)、「何になりたいの？」って訊くと、「お金持ち」って答えるんだけど、「じゃあどうやってなるの？」って訊くと、「うーん」ってそこでとまってしまう。

確かにうちの家庭は今貧困なのかもしれない。でも一番怖いのは、今貧困であることより、その貧困が連鎖してしまうこと。私は自分で選んだ道だし、自分の責任でもある。助けてくれる人もいるし、性格的にも「お願い！」って言える。なのでなんとかかやっていける気がするけど、そうじゃない人もいるじゃないですか。貧困で孤立している親もいる。そういった姿しか見ていない子どもたちは、道を切り開けることを教えられていないから、「僕はこうやって生きていくしかないんだな」って、その子も貧困になってしまうじゃないですか。それを止めたい。今はこういう環境だけど、普通に、何が普通かはわからないけど、ある程度の人に育てたいなっていう思いはある。

そのときに感じるのが、今はお金をかけないとできないような風潮だなと。私たちの時代はそうじゃなかった。少なくとも私はそんなことしなくてもできる、登れると思ってた。たぶんまだ可能性があったのかな。くさい言葉だけど、『夢』があった。でもどうやら今はそんなことない。なんでだろう。

そういったとき、つい学校のせいにしたくもなる。実際、学校を当てにしない親御さんも多くて、集まると悪口がすごい(笑)。確かに怒り方ひとつとっても、うまく怒れない。ヒステリックになったり、子どもの気持ちを考えてなかったり、依怙贖戻(えこひいき)したり。でも先生だって完璧じゃないですよ。それを親も一緒になってフォローしながらやっていかないといけないなと思う。

担任が若い女性の先生なんだけど、家庭訪問にみえたとき、すごく顔色が悪いんですね。それで「休みは何してたの？」って訊いたら、「採点したりとか」って言うので、「そんなことやってるの？土日はデートして！」「月曜日から金曜日だけ子どもたちを一生懸命見てくれればいから」って言ったんだけど(笑)。いい先生なんだけど、なんでも完璧にやってあげようとするので、子どもががんじがらめになっちゃう。「忘れ物絶対しちゃダメ！」、しっちゃダメなんですけど、「宿題絶対しないとダメ！」、しないとダメなんですけど、「絶対！絶対！絶対！」になってしまっていて。うちの子たちも、私が家に帰ると「宿題はしたから」って言う。何か違和感を覚えるんですよ。「与えられたことはやる」「したからよし！」って気がして。

職場でも感じるけど、今のゆとりの子たちもそうですよね。年配の方たちは悪く言うけど、決して悪い子たちじゃない。ただ言われたことしかできない子が多い。でもよく考えたら、そうやって育てられてきたんですよね。

もしかしたらそのことがさっきの『夢がない』につながるのかも。ダメが多い。「こうしないといけない」が多い。夢を見ようにも制約が多すぎる。夢を見る前にしないといけないことが多すぎる。だから与えられたことしかできなくなっていくのかなあ。

また貧困の話に戻ると、そうなったのは「離婚したあなたが悪いんでしょ」って思われる方もいる。「選ぶ相手を間違えた」「努力が足りなかった」とか。そりゃそうです。確かになかったとは言い切れません。でも母子家庭が増えている中、責任追及よりも、現実的に「じゃあ次どうする？」を社会全体で考えて欲しい。

今、「子育て支援」っていっぱい言ってくれてるんだけど、私はさっき言ったような塾に行けない子が集まれる場所みたいな支援が欲しい。

—先ほどの、勉強も教えてもらうんだけど、「可能性も持たせてくれるような」ということがすごく大事ですよね。

Mさん

そうなの！だから誰がやるかはすごく大事だと思うのよ。校長先生だった人がいってわけじゃない。そういうことをわかっている人にして欲しいなあというのが本当の私の願い。「今日は勉強したくないならしなくていいよ、じゃあ明日はやろうね」っていう先生でいい。それより今日は勉強しなくても、「何が好きなの？」「僕、こんなのが好きなんだ」とか、そんな会話の中から可能性を広げてあげて欲しい。そうしたら最近テレビで見かける子どもが巻き込まれる事件も少なくなる気がする。この前の殺されちゃった子たちも母子家庭で。すごい胸が苦しい。本当に、あの・・・苦しいね。なんであんな風になるんだろうって。「親がちゃんと見てなかった」とか「放ったらかしだったんだろう」とか言う人もいるけど、お母さんは生きていくためには、子どもを育てるには働かないといけないから、夜も働いて。その結果、子どもを見れないということもあっただろうし。まず犯罪する人がおかしいんだけど、それは除外するとして。夜、町を徘徊する子どもたちの中には何も生きる目的や目標がないから徘徊する、という子がいる気がする。その子の可能性をその子が信じられるよう教えてあげる人がいないんだよね。苦しいなあ。(可能性を)与えてくれる人、教えてくれる人がいなかったから、道を選べなかった。そういったことも含めて、私は貧困を断ち切りたい。

—こういった状況を知る人が増えたら、何か協力したいという人も少なからず出てくると思います。そう考えると、子どもの居場所づくりは、他の支援に比べると実現できそうな気がするのですが。

Mさん

まず場所の問題。学童を移転させる委員をしていたんだけど、移転先が子どもが集まるのを嫌がって揉めたことがあった。学童に入っている子が移転先の地域の子をいじめるだろうって。家庭環境に恵まれれない子だから、そうじゃない子をひがんでいじめるだろうって。大人のそういった考えが子どもにも伝わるから、子どもは学童の子たちを

バカにするようになる。そうすると対立が生まれてしまう。大人が種をまいている。

「学校の一角を貸してください」って頼んでも、「一部の子どものためだけに学校という公的な施設を貸すわけにはいかない」ってなる。少子化で教室があまっているのに？
と言ってもダメ。

あとは子どもがケガをしたらどうするのか？責任は誰がとるのか？保険をかけるならお金もかかるし。本当にやろうとすると、確かにいろいろな問題が出てくると思う。志だけではうまくいかないかもしれない。だから行政に一枚かんでほしい。他の支援に比べたらそれほどお金がかかることではないと思うし。

—過去の大変な経験の傷つきに向き合ったり、回復させたりするのは、すごくエネルギーがいることだったと思うのですが？

Mさん

私も早く戻そうと思って、無理してしまいました。けどやっぱり時間は必要かなあ。

すべてにおいて「がんばらないと」と思って、仕事も子育ても。子どもに対して「なんでちゃんとできへんの！」って言ってしまったり。しばらくそういうことがあったかな。そこをはたと気づかせてくれたのは周りの人ですね。

上の子があるスポーツのチームに入りたがって。そういうチームって親が出て行かないといけないことがすごく多い。でも私には金銭的にもそうだけど、時間的にも余裕がない。させてはあげたいけど、二の足を踏んでしまった。じゃあ監督さんが「できることをやってくれたらいいですから」と言ってきて。それで「あ、そっか」と気づいた。これまでできないことまで無理してやろうとしてたな、と。チームを見てたら、どんな強いチームでもひとりですべてのポジションを完璧にできる子なんていないんですよ。できることがあって、できないことがあって。みんな、自分のできることをやって。あとはチームワーク。できないことを補い合う。それを教えてもらった。そしてできることをやっていると、「あ、これもできるかも」って気づく。そんな感じでやってきたら、「意外にいろんなことできるやん」ってなってきた。「できることをやればいい」、それを繰り返していくと、できることがいっぱいになってくる。監督さんは子どもたちにもそのスタンスで接してくれるんですよ。でもやっぱり人間、欲が出てくると、あれもこれもってまた無理してしまう、私も子どもも（笑）。

ここにきての課題は、精神的な部分で子どもに頼りすぎているなということ。「子どももがんばるとるで、私もがんばろ」みたいな。

—それは別にいいのでは？

Mさん

いや、それをやられると、子どもたちがしんどいかなって。子どもに夢を託してしまうというか。だから子どもが大きくなったら、さっき言ったような塾の代わりになるような場所をつくってみたいとか、そういう自分の夢をちゃんと持ちたい。

—そこに気づかれたのは、お子さんとのやりとりの中で？

Mさん 私がちよっと夢を託すようなこと言ってしまうても、反抗はしない。うちはやっぱり子どもが私に気を使ってるところがあると思う。「お母さんひとりでかわいそうやで」って。

でも、ほかの家の子は違う。親の期待に反抗した子がいたのよね。それまで親御さんはお金も時間もかけて、「絶対やらなあかん！」という感じだったんだけど、ある日、その子がびっくりするくらいキレた。あれを見たとき「もうやめとこ」って思った。

だから「変に囚われて、こだわらなくてもいい」と子どもに伝えていきます。今、ラグビーのワールドカップをテレビで見かけるから、「別にこれにこだわらんでええんやに。ラグビーでもええんやに」って（笑）。他のスポーツより競技人口少なそうやし、チャンスかなと。あかんあかん（笑）。

やっぱり私たち大人がまず変わっていかないとダメですよ。もっと自分たちができると思えば、子どもたちもそう思ってくれるんかなあって。

—もしかしたら言葉よりも、その姿勢とかスタンスのほうが伝わるかもしれませんね。

Mさん 子どもをよく見ると自分と一緒にのこをやってますもんね。おせっかいというか。もじもじとチームに來れない子もいるんですけど、えらい早く出かけたなと思ったら、その子を誘いに言っているみたいで。親御さんに「呼びに來てくれたわ」って言われたり。かと思えば「あいつは言うことを聞かん！」って怒ってる。「無理強いしても仕方ないやん、じゃあどうすんの？」って訊いたら、「殴ったる」って。殴るわけないんですけどね。「それで解決する？」って言うと、自分で考えていろいろやってるみたい。

悪いことっていうか、そういうことも経験して覚えていかないとしょうがないかなあって思う。難しく考えたら難しいし、簡単に考えたら簡単なんですけどね。当たり前のことを当たり前にするみたい。意外とそれができないんですけど。変な見栄とか意地とかプライドとか。捨てられないよね。私もすごかった。なんでもできるって思ってたんだから。それも私だったんですよ。

あなたも何か悩みある？

—さっきの完璧主義じゃないですけど、どこか自分で自分をがんじがらめにしているというか。そうするときっと相手にも「こうすべき」とかひそかに求めてしまっているんじゃないか？と思うときがあります。

Mさん わかる。私もひとつくらいしか答えなかったもん。赤と白と黒くらいしかなかったかな。確かに答えがひとつのほうがもめなくていいんだけど。それが答えはひとつじゃないんだなあ、どこの世界に行っても。だからもめるんだなあ。

—フレンテの仕事は、いろんな人がいるし、いろんな考えがあるし、そういうことを認め合っているというスタンスでやっているのに、ひそかにそうじゃない部分がある自分。葛藤しています。

Mさん やっぱり頭でわかっているけど、体感しないダメなこともあるやろね。私も当事者になるまでは、「母子家庭のお母さんって、キリキリして」って勝手に思ってたけど、いざ自分になってみると、「あ、こんなもん？」って。貧困って言われても、「あ、そういえば貧困？」みたいなの。あまり意識しなくなった。人と比べなければいいんですよね。比べても仕方ない。

—貧困は「お金がない」＋「縁がない」と言っている人もいます。お金がないだけだったら、幸せとは関係ない。それはお金がないだけ。貧困は、人の縁やいろいろな縁もないという話があります。お金の問題はそれだけで切実で、縁があったらなんとかなるとするのはキレイごとのようにも思えますが、Mさんのお話を聞いていると、救いというか希望というか、可能性につながるものを感じます。

Mさん 縁ね、それはあると思う。だけど皮肉なことに貧困という状況に陥ったとき、自ら孤立してしまいがち。バリアを張って。相手もバリアを張るし。「うちはこのだから」「あそこはこのだから」。でも話を聞いてみると、どこかに共通点があって。だからバリアの中に入ってみないとわからないのよね。よくよく考えたら、みんな親がいて親戚がいてつながっている。そこで「え、遠い親戚やったん？」とか「え、そこ知り合いやったん」というくらいのつながりがわかるだけで、結構仲良くできたりする。最後は人類みな兄弟（笑）。だからうちの子が「うちとCさんとこって本当の家族みたいやなあ」と言う。

Cさんって外国育ちで、ダンナが日本人なんだけど、子どもが同じチームに入っていて。私とか子どもの前でも、ぶちゅーってキスするし、派手にケンカもするのね。ストレートに気持ちを口にするから、周りから孤立してしまうこともある。Cさんからしてみれば「なんで日本人はこんなにも本音を言わないのか？」が不思議みたいで、「なんで？なんで？」ってあまりに言うから、私も「日本人はストレートに言うよりも、察するというのを大事にしている。それは思いやりから。どちらがいい悪いじゃなくて、そこは違いだと理解して」と言い返したんだけど。

彼女も少数派だから疎外感があるし、実際差別を感じることも少なくないと思う。それで「もういい、子どももチームを辞めさせる」となってしまったこともあって、そのときは「あなたは来なくてもいいけど、OO（Cさんのお子さん）は来させて！」って言った。あなたが感じるところがあるのはわかるけど、それはあなたの問題。辞める辞めないは子どもの気持ち。自分の考えがあるのはいいけど、子どもにも同じ考えを持たせてはいけない。その子はその子で考えて気づいていかないと。逆の立場だったとして、「私がこのだから、子どもももういいの」と言ってしまったときに、「それは関係ない。子どもは子どもだ」と言ってくれる人が欲しい。悪いスパイラルは切らないと。

だけどCさんを見ていると、日本人も「I love you」までは言わなくてもいいけど、もう少しあなたが大切ですよって伝えなければいけないと思う。下の子がなにかめげ

たときに、「お母さん、僕は宝物だよな？」って言ってきて。たぶん昔私が「宝物だよ」って言ったことがあったんだと思うんだけど、すっかり忘れて「何？何？」って内心焦りながら、「宝物だよ〜」って（笑）。あの子、あのとき追い詰められていたのかな。学校でも怒られてばかりみたいだったし、「もっと大事にして」とか自分の価値を確かめるとか、そういうことだったのかな。

でも本当に子どもは宝物。子どもができると、これまで自分の置かれていた世界とは違う「えーっ！」ってことがたくさん出てくる。今日は時間ができたから、ちょっと寝ようと思っても、「こんにちはー！」って。自分の子どもだけじゃなく、ほかの子どもも現れる。最近は気にせず「おばちゃん、ちょっと寝ます」って言うけど（笑）。

—離婚されて四日市に来られた際、知り合いの方はいらしたんですか？

Mさん 四日市近辺に母や姉妹がいるけど、ほかはいない。大変な経験をして、どこかでリセットしたかったので、携帯も解約して、昔の友だちにも連絡をとらず、親子3人だけでスタートしました。でもあとになって子どもに「もう引っ越しはしないで」って言われました。「友だちつくるの大変なんだよ」って。でも友だちもできて、わーっていつもやってくるから、「ひとりになっても、またできるやろ？」って言ってます（笑）。

—それがすごいと思う。お子さんもそうですが、Mさんご自身が、全部断ち切って、新しい場所でひとりで一から始めたのに、もう地域の中で自分の場所をしっかりと作っているじゃないですか。大人になってから、なかなかそういうことはできないなあ。

Mさん 最初は学校の行事に行っても誰もしゃべる人いないし。でも手を差し伸べてくれる人はいる。同じような境遇の人とかが、一言二言声をかけてくれたりすると、またちょっと話したりして。それで新しい輪ができてきて。そうすると、昔からある輪の人たちがいるじゃないですか。そこにはこちらからはなかなか入れないんだけど、こちらが楽しそうにやっていると、向こうのひとりの人が「おもしろい、入れて」ってくる。そうするとまた輪が大きくなってきて。

そうなるとう当然「この人はこうよ」「あの人はこうよ」ということも出てくる。たとえばあるお母さんが、みんなから陰で悪く言われている。子どもも「あそこの子、いつもおどおどしとるよな」「拳動不審やよな」とか。確かに問題はあるけど、その向こうに何かがあるような気がしてた。そしたらみんなでバーベキューをしたときに、そのダンナがお酒に酔って、暴言というかすごい言葉の暴力があって、「ああ、こういうことか」って。そのあと、その家の子が私の横に来て食べてただけど、「お父さん、いつもあんな感じ？」って訊いてみた。ほかのお母さん方も気にはなってると思うんだけど、訊けないですよね。でも訊いちゃうんだな、私（笑）。そしたら最初は口ごもっていたけど、「たまに」って。「ああやって言われるの？」って訊いたら、「言われる」って。何もしてあげられないけど、子どもの逃げ場所は作ってあげないと。もし何かあったら「うち来るかなあ」みたいな。

—そういった親以外の大人との関わりがすごく大事で、そんな大人がいるとわかることが子どもにとっていい影響を与えるみたいです。先ほどの家庭訪問の先生のお話にしてもそうですが、Mさんのかける一言が、その人の支えになっている気がします。私だと深刻な感じになってしまって、ますます相手を追い詰めそう。Mさんのような感じに声をかけられないんですね。

Mさん 深刻になっちゃダメ、真剣にはならないといけないけど。きっと私がそうやって声をかけて欲しいんです。監督さんの「できることをやってくれたらいいですから」という言葉でふっと心が楽になったように。あのとき「これ絶対やらしてもらわな困ります」って言われてたら、絶対やってなかったし、逆に「何もしなくていいですよ」もちょっと違う気がする。少なくとも、昔の私みたいな状態の人に、「仕方ないよ」とか「こうせなあかんやん！」っていう言葉はかけるべきじゃないなということにはわかった。

それに自分がいろいろ経験したことによって、他の人が気づかない人の痛みとか悩みとかそういったことに気づけるようになったのも、すごくよかったなと思う。片親であっても両親がそろっていても、どんな家庭でも、どんな人でも、きっといろんなことを抱えているんですね。

私たちがここに引っ越した日がたまたま東日本大震災があった日で。親に買ってもらった家財道具とか全部売り払って、あのとき本当に虚しかった。だけどテレビで現実とは思えない映像が流れてて。何も悪いことしていないのに、全部津波で流されて、すべてなくして、命までなくして。こう言うと被害に遭われた方には申し訳ないけど、ものはなくなっても私たちには命があるって思った。

いつも3月11日になるとテレビで特番があるじゃないですか。そうするとまた1年経ったんやなあって。東北の人たちががんばってこうになりましたとかテレビに映っていると、私たちもこうだったけどこうなったよね、がんばったよねって。10年先、20年先も3月11日になったら「この日にここに来たんだよ」って子どもたちと話ができたらなあと思う。

シングルマザーの多くは、仕事の掛けもちをして一日中働き続けているにもかかわらず、平均就労年収は200万円以下で、その厳しい生活に疲れを感じてしまっている方もたくさんいます。

でも、Mさんはとても前向き。他の人が気づかないような人の痛みや辛さなどを感じとり、押しつけではなく、さらりと明るく気遣う人柄が印象的でした。人との関わりについて語られた「真剣に、でも深刻にならず」という言葉には、大変な困難に向き合われた経験からの「重み」を感じました。表面的には見えづらい、地域や子どもたちが抱える問題をどう解決していくか。今、Mさんのような存在が、地域に求められているのではないのでしょうか。